

潜伏(1657年～)

バスチャンの伝説と、潜伏して信仰を守り伝えたキリシタンたち

雪のサンタマリア(日本二十六聖人記念館蔵)

バスチャンの日繰り(外海歴史民俗資料館蔵)

マリア観音像(外海歴史民俗資料館蔵)

17世紀中盤、日本のキリスト教徒たちは、潜伏しながら信仰を続けました。黒崎や出津の村を含む外海では、二人の人物の教えがキリスト教の思想や慣例の中心となっていました。一人目の人物は数多くの伝説を残したポルトガル人宣教師サン・ジワン神父でした。二人目の人物は、元は長崎南部の仏教の寺の門番を勤めており、その後サン・ジワンの弟子となった日本人伝道士のバスチャンでした。彼ら二人は、1650年代、キリスト教徒への弾圧が激しかった時代に、隠れキリシタンたちのコミュニティへ訪問するなどしました。

バスチャンは死の前に四つの予言を残しました。鎖国が行われていた250年間、外海のキリスト教徒たちは、再び自由にキリスト教を信仰できる未来についてバスチャンの予言に希望をかけて密かに信仰を守り続けていました。

バスチャンの四つの予言

1. みんな七代までわが子とする。
2. その後はコンヘソーロ（告白を聞く神父）が大きな黒船でやってきて、毎週でもコンビサン（告白）ができるようになる。
3. どこでも大声でキリシタンの歌を歌って歩けるようになる。
4. 道で異教徒に出会うと、相手が道をゆずるようになる。